

蓬萊町だより

日会部
町菜化
号二
月五
年六
六月
成行
平成
発者
集者
編者

本郷台に咲いた焼跡文化の花(その二)

日本随筆家協会々員 上野 静

今次大戦の戦火に依る瓦礫の本郷台の一角、東大農学部前の角地、高崎屋酒店を軸に左側が旧中山(仙)道、右側が旧岩槻街道である。

その中山道が白山通りに抜ける中央部から少し先、左側に奇蹟的に戦火の洗礼を免れたデカタンス、大正ロマンの名残りを留める占色蒼然とした平屋建ての関本木炭商、瀬戸物商、砥(研)師など、三軒ほど(現在は巨大なマンション)が焼け残っていた。

その前右側は当時、付近一帯が丸焼けになった空地(現在は無蓋の広い車庫)に昭和二四年頃大衆演劇の中村座が焼跡文化の種火をあげたのである。

一面が焼野ヶ原と化した本郷台も旧住民が徐々に疎開先から引き揚げてきたり、新たに焼跡地を捜し求めて家屋を新築、新生活を再開した。しかし、木材、建築士の少ない時代で殆どが仮り建築でまずは取り敢えずといった小家屋だった。しかし、戦火の爪痕は凄絶、惨憺として何れの道路も凸凹道で荒れ放題のまま、根津神社の森に至るまで焼け残っ

た二、三軒の家屋を除き一面が瓦礫と焦上の殺伐とした広い空地だった。

白聖(当時)の日本医科大学は無論のこと、根津神社の森から東大農学部のキャンパスに至るまで大小の残塊を通して一面がマル見えだった。自動車も稀に通る程度、路面電車もメチャ滅茶のダイヤで長時間の間隔で走っていた。従って二酸化炭素の排ガスは殆どゼロ、夷音も断続的に聞こえる程度で殆ど死のマチと化していた。遙か西南の彼方に目を遣ると僅かながらも富士の山頂を見ることが出来たのである。

夜ともなると無数の星が果てしなく広い円形の大宇宙に星屑のようにピツシリと光り輝やき、その中を時々流星が矢のようなスピードで落ちてゆく。こんな天空の劇的ドラマの演出は今日の東京では想像も出来ない素晴らしい感動の光景だった。夕闇が迫ると根津神社の森に住み付いた多数の蝙蝠達が森から出てきて薄暗がりの空間をバタバタと羽音を立てて飛び交うのである。そのさまは、とても東京の下真ん中の出来ごととは思えず、宛も過疎の山村のジャングルの山野を思出す風景だった。

私は戦後二年目に根津西須賀町(現在弥生一丁目)に小家屋を建てて一人で住んでいた。真夜中に突然、日が覚めるときまざまな出来ごとが頭の中をオーバークラッシュし、無人島にいたような無気味な恐怖が身に迫る思いだった。一寸した物音でも時にはヒヤリとし

肝を潰すほど怖かった。

白聖(当時)の日本医科大学も戦火を被って半壊状態で白壁の窓は戦中、爆撃されたことを装って黒煙を画いていたのが当時もそのままになっていた。現在の渡り廊下で繋いだ新館は当時、専修商業学校(専修大学とは無関係)のキャンパスだった。それも丸焼けになって凄絶な残骸が此処、彼処に散乱していた。娯楽といえど各家庭とも殆どが戦火の中から漸やく持ち出したラジオを聞く程度で外に何もなかった。

無論、新聞の配達もなかった。そんな時だった。

冒頭に記述した中村座の一座がやってきたのである。——無論掘つ立て小屋の芝居小屋で文字通りドサ回りの村芝居の一座である。娯楽施設の何もない時代だった。

住民達は乾き切った焦上に水を得た樹木のようになり、生きとし、喜びに沸き立った。男も女も、若者も老人も子供も夕食もそこそこにワンサと押しかけてきたのである。

一座は子供(チビ役)を含めて十数名だった。楽器もオンボロながら、クラリネット、大小のドラム(太鼓)、アコーディオン、ギター、バイオリン、三味線など一通りを揃えていた。その中でクラリネットは占ほけてはいたが水際だった美しい音色で絶叫するような音声で芝居小屋独特の雰囲気を出していた。他の楽器もいづれも使い古したものらしく、余り美しい音色を出していなかった。

従つてクラリネットが芝居全体を取り仕切り、高低の音色を織り交せて際立たせ、景気付けに大きな役割を果たしているようだった。芸題は大衆演劇のことで種々様々だった。時代劇(チャンバラ)、新派、漫才(戦前型)、喜劇コント、歌謡ショーなど多種多彩だった。

座長は中村八重子、副座長はその主人らしい中村勘三郎、何れも三五〇四五才位でフィリングのよく合った二人だった。中堅役者は二〇才から三〇才くらいで娘達が半数(男役もこなして)以上。チビの子役は男女二〇三名のようだった。

一座のスター中村ナナ子は二二〇三才。面長で眉目秀麗、絶えず微笑を浮かべ、スラリとし、当時としては最先端をゆくファッションスタイルの美女だった。

彼女が剣劇で数名の追っ手に囲まれ、素晴らしい立ち回りでバツタ、バツタと薙ぎ倒し、観客席に顔を向けてニッコリ笑う、笑顔には華やかな女の美しい魅力があつて観客席は大燥ぎで沸きたつた。

拍手と喝采の飛び交う中、彼女へのご祝儀として此処、彼処から五〇円、百円(当時)何個か包んだ紙包みを舞台に投げ込んでいた。

中には札ビラを何枚か重ねて投げ込む熱狂的なファンもいた。彼女は美人である上に芸達者で得意の殺陣は段平の激しいアクションで旅役者としては最高の美技と見られていた。多数のファンの中には狂熱的で一座に旅鳥の

ように付いて回つた「追っかけファン」もいたということだった。

当時、二〇代の若かつた私も彼女のファンで可愛げのある笑顔と美しいスタイルと素晴らしい殺陣に、酔い痴れて感動、中村座のシルエットのよう始ど毎夜駆けつけたものだった。一座の十八番は新派の戦記物だった。

戦死したとばかり思っていた老夫婦の前に某日、突然、長い戦地生活で瘦せ細り、寝れ果てたボロ服を着た旧日本兵の哀れな姿で現れたわが子を見て、悲しみに嗚咽、慟哭し、抱き合うシーンは、なお、戦争の余韻が残る時代だっただけに感動的で観客席の涙を誘うものだった。

一座は西は遠く九州、四国、関西方面を軸に東は仙台、福島あたりを回り、文字通り、日本全国を跨にした旅から旅への渡り鳥だった。全座員には中村姓を名乗らせ、ファミリー一家のように心暖かい一族で纏まっているように見えた。しかし、風説では口減らしの為に座員になったり、前借で一家の犠牲になつて入団した役者もいるということだった。

無論、リハーサルは厳しく、多数の役者が血を流したり、生傷の痕を見たという話もきいた。こうしたことは独り中村座が行き過ぎていくという訳ではなくこの社会の極く普通の扱ひで常識化されているようだった。劇中、時々、トチつたり、所作の緩慢な役者達を見かけたことがあるが連日の激しいレッスンの繰り返しで疲れが出ているようだった。

た。——華麗な劇団ではあつても舞台の裏では絶えず、鞭や叱咤が激しく飛び交うのだ。無論、座長としての愛の鞭であり、激励の叱咤であるに違いない。

私はフト、彼の音、一世を風靡した物悲しいリズムに乗つて唄われた流行歌謡曲、渡り鳥『サーカスの唄』(西條八十作詩)を思い出したのである。

『旅の燕淋しかないか

俺も淋しい サークス暮し

トンボ返えりて 今年も暮れる

知らぬ 他国 の夢をみた

私はサーカス団と重ね合わせて役者達、共通の苦悩を認識、胸の内で彼等を憐れみながら愛情の心を以て励ました。

何時も舞台では微笑を浮かべ爽やかな芸風を見せる一座のプリマドンナ・ナナ子も例外ではない筈である。(次号へ続く)

町会活動の概要

平成十三年十一月から

平成十四年 四月まで

総務部

13年 11/18 向丘地区町会連合祭り

12/12 於 誠之小学校

於 常瑞寺

21名出席

14年 1/10 文京区町会連合会新年会
3/7 部長会

婦人部

13年 11/15 秋の火災予防運動
12/1 歳末助け合い募金
¥二一、四〇〇

御協力有り難う御座いました。

14年 12/6 懇親会 17名参加
2/23 餅つき準備
3/28 駒込母の会連絡会議

交通部

14年 1/10 駒込交通安全協会新年会
2/28 コミュニティゾーン
第三回支部会

駒込交通安全協会理事会

防火防災部

13年 11/11 防災コンクール
於 駒本小学校

14年 12/23 年末夜警開始 29日終了
1/13 本郷消防団新年会
1/25 年末夜警反省会

防犯部

14年 1/8 駒込警察署武道始め式
1/18 駒込防犯協会新年会
3/20 春の地域安全運動

文化部

14年 1/8 成人式 お祝い
町会より記念品 8名
2/24 餅つき会 真浄寺前

3/21 新入学児童 お祝い
於 根津神社

4/4 新入学児童
町会より記念品 8名

青少年地区対策委員会

14年 11/4 東大オリエンテーリング
1/23 青少年地区対策委員会新年会

『平成十四年度成人者』

当町会で今年成人を迎えられた方々は左の通りです。おめでとうございます。

- | | |
|---------|------------|
| 宮岡 正人 様 | 向丘 2-15-12 |
| 真下 秀伸 様 | 2-16-10 |
| 若林 匡智 様 | 向丘 2-18-11 |
| 佐藤 恵美 様 | 2-15-17 |
| 新野 尚子 様 | 2-17-14 |
| 益子 輝美 様 | 2-18-1 |
| 五十嵐里美 様 | 2-24-8 |
| 阿部 光恵 様 | 2-35-8 |

『平成十四年度新入学児童』

当町会で今年新一年生になられた方々は左の通りです。元気で明るいよい子にエールを贈ります。

- | | |
|---------|---------------|
| 大西 由倅 様 | 向丘 2-15-11 |
| 井川 祐馬 様 | 2-16-7 |
| 佐々木孝俊 様 | 2-27-11 |
| 今堀 和樹 様 | 2-27-26 |
| 鈴木 泰音 様 | 2-15-15 (高橋方) |
| 大西 百花 様 | 2-17-1 |
| 石田 恭子 様 | 2-18-13 |
| 桑田 理駒 様 | 2-38-24 |

計報

当町会の方で平成十三年十一月〜十四年四月にご逝去された方は左記の通りです。謹んでご冥福をお祈りいたします。

- | | |
|--------------|-----------|
| 関根 鈴枝 様(九一才) | 向丘 2-15-2 |
| 小野 トミ 様(八五才) | 2-17-10 |
| 宮田 富雄 様(七二才) | 2-15-13 |
| 赤木恵美子 様(六二才) | 2-17-20 |
| 佐藤 ちえ 様(八八才) | 2-27-24 |
| 猪熊 良晃 様(七六才) | 2-24-1 |

蓬萊町恒例「餅つき大会」

二月二十四日 日曜日

穏やかに晴れた天気の中、町会のイベント餅つき大会が、賑やかに行われました。

朝九時から、役員・婦人部の方々により、会場造りが手際よく進みました。今回は、青年部によるゲームコーナーも造り、町内の方々に一人でも多く参加して頂ける様、工夫を凝らしました。餅米は、婦人部の方々が、前日、海蔵寺様の御好意で境内をお貸しいただき、研いで準備してくれました。

いよいよ餅つき大会が始まりました。

ここちよい響きの杵の音と共に次々つき上がった餅を、あんこ餅・辛味餅・黄粉餅にしました。焼きそばと共に好評で、参加してくださった方々は、用意された座席で、楽しそうに食べておられました。

餅三〇キログラム 焼きそば 一二〇食

穏やかな日差しの中、町内の方々の多数の

参加を頂き、賑やかに楽しいひとときを過ぎました。次回も大勢の方々の御参加を頂き、町内の親睦を計って行きたいと思いません。(文化部)

猪熊良晃氏の急逝を悼みて

池田 暉

「森林で巨木が倒れる様に、岩が風化して石ころになるように、自然死をしたい、死と云う大仕事は、秋が過ぎて冬が来る様に、大自然の運行の中に溶け込んで行く事だと思ふ」と或る俳人が書いています。確かに残り時間の少なくなった人々に取って身に沁む実感です。それにしても猪熊さんの訃報は同じ齢の私にはショックでした。

良晃さんは大正十五年本郷区神明町で清水繁蔵氏の六男として誕生しました。家業を手伝う傍ら早稲田の工手学校に学ばれました。昭和二十年三月の大空襲で被災し父は焼死、良晃さんは九死に一生を得ました。戦後東京都交通局に入所、二十五年には縁あって猪熊繕一氏の養子となり、六十年三月に定年退職されるまで三十七年間都の職員として都民の為に盡くされました。

私が猪熊さんと親しく触れ合う様になった切っ掛けは、一九八一年(昭和五十六年)今からふた昔前に開かれた「蓬萊町百年記念行事」の実行委員として共に力を併せた時からです。当時氏は東京都の築地市場に勤務されていたと思います。たまたま、私の俳句の仲間

が氏の上司で、ひよんな事から氏がそのA氏と同じ職場だと知り、時々、A氏とも、猪熊さんとも、話題の種にした事もありました。昭和四十二年から四十七年にかけて都電が全面的に縮小される事となり、それに伴って電車に関わっていた人々が他の部署に移動しました。猪熊さんは築地市場(魚河岸)に配置転換されました。

猪熊さんの養父繕一さんも、やはり都電(その頃は市電と云っていたかと思いますが)に勤められていたと聞きました。築地市場ではプロパーな職員に交じって、全く違った職場だけに中々にご苦労も有ったかと思えます。市場での仕事は、業務部普及課広報係長のポストで、市場業務の普及啓蒙、マスコミ対応、TV放映(市場たよりの番組)の企画、内外視察、見学者の案内など渉外関係の仕事をごなし、持って生まれた明るく誠実な人柄から関係者や同僚からも信頼を受け多くの実績を残されました。

町会活動でもご存知の通り、会議の進め方や会員の融和の為の企画等々築地市場での経験が何かと役に立って居たのかも知れません。「ひとたび仕事を離れると、お酒も程ほどに飲み、興に乗ればカラオケで纏蓄を披露し、楽しく気分を転換されていまして」と上司のA氏もその人柄をたかく評価されていまして。都を退職されてからも今、村田簿記で勉強しています」と聞いた事が有ります。また、趣味で始められた社交ダンスも堂に入った物と

聞きました。その、常に前向きな努力と気力には頭が下がりました。数年前、脳溢塞で倒れた後よりハビリに専念され、確か何ヶ月か前に路で出会った時も杖を手にしては居ましたが、にこやかに「お陰様で」と順調な回復をされている様に見受けました。『まさか』と言う言葉が、これ程切実に私の胸を打った事の無い急逝の報せでした。私の人生の中で心に残る素晴らしい友人の一人である猪熊さんを語るには少な過ぎる紙面ですが、氏のご冥福を心からお祈りして筆を擱きます。 合掌 連木

蓬萊句壇

春一番からくり時計動き出す 青木 沖寿
亀鳴くか鳴かぬか孫と賭をする 福山 七重
春風に乗って行きたやアメリカへ 船橋 小糸
合唱は桃の節句の祝い歌 岡山 栄子
何語る同じ眼をして春の鴨 彦坂つぐを

編集後記

今年是全国的に春が早く根津様のつつじも四月半ばが最盛季でした。それに反して景気は遅々として回復の兆しが見えませんが、でも明治維新や敗戦直後の世情を考えれば大変とは云えません。こう云う時こそ頑張って生きましよう。

編集委員 三宅栄三 竹中俊之 常岡 裕
青木喜一 池田 暉